

灯すことを 100年や200年も続く文化にしたい

気仙沼市

杉浦 恵一 一般社団法人 Nr.12

取材日 2013.05.27

一般社団法人Nr.12代表理事、ともしびプロジェクト代表。ヒッチハイクでの旅の途中で東日本大震災が起こり、旅を中断して東北への単独支援を開始し、現在は気仙沼に拠点を置く。「忘れないをカタチに」をスローガンに、それぞれの場所で毎月11日にキャンドルを灯すアートイベントプロジェクトを立ち上げ、現在は雇用創出にも取り組む。

3月11日 14時46分

愛知県の実家にいた。ゆら〜と揺れが来たから立ちくらみだと思った。久しぶりの立ちくらみだなんて思っていたら、リビングからおばあちゃんの叫び声が聞こえた。何かとリビングに駆けつけると、テレビには津波の映像が映っていて衝撃を受けた。これが本当に日本で起きている事なのかと信じられなかった。

愛知県の揺れ方は震度3程度の長い横揺れのイメージで、単なる立ちくらみだと思った人は知り合いにもたくさんいた。

怪我を治して東北へ

大震災の前は、無一文でヒッチハイクをしていた。愛知を出発して太平洋側から東北を抜けて北海道を回り、日本海側を通して愛知まで帰ってきた。暖かくなったら西日本に向かおうと思っていた矢先の出来事だった。東北にはヒッチハイクの旅でお世話になった方がたくさんいる。恩返しではないけれども、何かしたい、何かしなければと思った。

ところが震災が起こる2日前、足に怪我をしていた。足が曲がったまま伸びなくなってしまい、医者にも1ヶ月は安静にするようにと言われていた。これでは動こうにも動けない。何とか早く治るように願いながら安静にしていたら、1週間程で膝が伸びるようになり、走れるようにもなった。安静中も何かをせずにはいられず、学生団体と一緒にあって2011年3月12日に募金活動を行ない、約400万円を集めた。けれども直感的に自分がすべき事は募金活動ではないと感じ、同時に絶対に東北へ行ってやるという思いが強くなった。怪我が治った頃、物資を集めているけれど、肝心の物資を送る手立てがなくて困っている方と出会った。そこで知り合いからトラックを借りて、物資を受け取り迷わず東北へと向かった。

後輩と一緒にトラックを運転して東北に向かっていったが、東北のどこに向かうかは決めていなかった。



た。最初は郡山を経由しなければ東北に行く事ができなかった。移動しながら愛知の先輩に電話をすると、電話の向こうで東北の事を調べてくれて、福島が大変だと教えてくれた。震災から1週間後で、ちょうど福島第一原子力発電所の事故が起きてすぐの時期だった。「いわきに入ったら死ぬ」「入ったら車が被災車両とみなされ出られなくなる」という情報が流れていた。そのため、いわき市への支援が遅れていて一番困っているという。何も考えずにいわきに入った。競輪場で物資の集積をしていると聞いて、とにかくそこに向かってトラックを走らせた。いわきには夜中にたどり着いたが、家の明かりがまばらにつき、その明かりは異様な感じがして違和感を覚えた。辺りは暗く、よく見えなかったが異様な雰囲気が漂っていた。競輪場にたどり着いて初めて人に出会い、物資の荷卸しを手伝ってもらった。

その日の夜は車の中で寝て、翌日はいわき沿岸の四倉支所を訪ねた。何か手伝える事はないかと聞くと「いっぱいあるよ、寝泊まりもここでいい」と部屋を与えてくれた。そこで支所の方々と一緒になって、物資の仕分けや配布を手伝った。最初に四倉に行った時、地元の方が隣の久ノ浜を案内してくれた。自衛隊が瓦礫を横によけて作った一本道以外は何も無かった。地元の方と一緒にそこを何度も往復しながら、ここで何をすればいいか考えた。何かをしなければいけない、けれ

ども現地の様子は外からはまったく分からない。現地の様子を見た自分達が何をすべきかと考えた時に、まずは東北が大変なのだと思えばならないと思った。愛知に帰ると、たくさんの人から東北の様子について聞かれたので、東北は大変な事になっている、物資も全然足りていないからどんどん持って行こうと伝えた。地元で四倉へと物資を運ぶグループを作って、物資を運ぶためのサイクルを作った。この時は四倉に絞って支援をしていた。四倉だけで手一杯だと思ったからだ。僕はもともと無一文で旅をしていたので、お金を持っていなかった。知り合いにお金を振り込むように頼み、ブログでも東北に向かうためのお金を振り込んでくださいと支援を呼びかけ、口座番号を掲載した。旅先で1回会っただけの人や、ブログを見てくれている人が振り込んでくれた。

地元での雇用創出

震災から1ヶ月ほどが過ぎ、必要なもののニーズを探る必要があると思った。緊急支援のフェーズから、生活をどう再建していくかを考える時期に変わってきていた。物資支援に回っていた避難所を対象に400枚程のアンケートを配った。しかし、当時は任意団体であったため、団体を怪しんで受け入れてくれない避難所もあった。原発の影響がどれほどのものかも分からない状況にあったので、僕自身はこのままいわきに人々が住み続ける事に疑念を抱いており、アンケートと一緒にいわき市から出る事を呼びかける案内も配布した。たくさんの方が受け入れをしている事や、家賃が無料の物件などの情報を載せた。ところが実際に問い合わせがあったのは2件程で、とても驚いた。この時点では、なんらかの理由があっといわきから出る事ができない人が多かった。そしていわきを出る事ができない事情のある方全員が、「この先仕事が心配です」と書いていた。仕事がないなら作るしかない。しかし1回も働いた事のない僕がどう仕事を作ればよいのか、まったくピンとこなかった。

東北から帰る途中、愛知で支援を始めた時に知り合った方から電話がかかってきた。愛知のある企業の社長と一緒に東北へ向かっているところだという。制御盤を作る製造業の会社で、アジアに支店を建てる予定があった。そこに震災が起き、これから東北では仕事が無くなるかと考え、アジアの支店をやめて東北に建てようと考えているのだという。特に現地にツテがあるわけではなく、東北で活動をしていた僕から情報を聞きたいということで、茨城付近のパーキングで合流し、話をする事になった。1時間程これまでの話をして、今ちょうど現地では雇用が必要なのだと伝えた。いわき



撮影：2013.4.28 ともしびプロジェクト
気仙沼大川桜並木 未来への集い

の知り合いを紹介し、その後いわきの議員さんの家で地元の方々と社長と一緒に食事会をした。愛知から企業を誘致したいと話すと、全員がわんわん泣きながら「ありがとう」と言ってくれた。それを見た社長もスイッチが入って、「絶対にいわきに建てる」と約束してくれた。6月1日には物件も見つけて求人も始めた。まだ事務所が無かったので、面接はホテルのロビーを借りて行なった。そのまま会社が立ち上がり、今も地元の方を雇用している。

ともしびプロジェクト

キャンドルを灯し始めたのは2011年11月11日からだ。仮設住宅で活動をしていた時、何が不安かと聞くと、たくさんの方が異口同音に「忘れないでほしい」と言っていた。ゴールデンウィークが終わったあと、ボランティアの数が急に減った事は僕でも分かった。支援を受けてきた方々ももちろん感じていて、ボランティアはこれから普通の生活に戻って被災地の事を忘れてしまうと思うのだろう。忘れてなどいない事を形にできないかと考え、あるイベントでキャンドルを灯した事を思い出し、キャンドルに火を灯す事で忘れない事を形に表せるのではないかとひらめいた。何か支援をしたいけれど、何をしてもよいか分からない人は大勢いる。気休めではないが、キャンドルに火を灯して震災を忘れていない事をSNSを使って表現する事で、何かをしたい人も、忘れないで欲しいと思っている人もつながる事ができる。これならば、遠くにいても参加できる。まずはやってみようと思いを始めた。「ともしびプロジェクト」の名がついたのはもっとあとの事だ。ともしびプロジェクトでは山梨のキャンドル工房「あかり堂」の協力のもと、手でこねてつくるキャ

ンドルキット「KONECANN（コネキャン）」を復興キャンドルとして販売している。気仙沼の主婦の方々にパッキング作業を手仕事としてお願いしている。KONECANN購入者は手仕事としての雇用創出、バラバラになったコミュニティの再生など、間接的に被災地を支援する事ができる。東京でもこのKONECANNを使って11日に灯りを灯し、大震災を忘れないよう呼びかけるコミュニティができた。その中で東北のために何かしたいと話し合いが行なわれた。いろいろな立場の人が集まっていて、このコミュニティの中でツアーを組み、東京から東北に来る事もあった。こうしたつながりから「ともしびプロジェクト」の支部が九州や佐賀など全国25か所にできた。

気仙沼をはじめ被災地の沿岸で、「3月11日にキャンドルを灯す」事を、この先100年200年と続く文化として残していきたいという夢がある。だからこそ事業化をしたいと考えており、リメイクしたキャンドルで作るキャンドルホルダーの販売を始めた。全国の結婚式場や寺院、個人から不要になったロウソクを提供してもらい、気仙沼のお母さん達が再形成して復興キャンドルホルダー「TOMOCAN」を作成している。この売り上げの一部はお母さん達の収入となり、地元の雇用につながる仕組みだ。

ずっとボランティアで続けていくには人的、資金的な面から必ず無理がくる。気仙沼に工房を立ち上げて、そこに雇用が生まれ、これを生業にして暮らす人が生まれたら、100年後僕は死んでいるけれども11日にキャンドルに火が灯る。この文化を知らない人が見て、なぜ気仙沼のあちこちで11日にキャンドルに火が灯るのかと聞かれた時、2011年3月11日に大震災があったと語られる。そうして大震災の事が後々まで伝わるよう、感性に訴えるアートの形式で後世に残していきたい。たくさん石碑や文面で昔の震災に関する記録が残っていたけれど、堅苦しく、普段から一般人が接する事はない。だから多くの人々が忘れてしまったのではないだろうか。長くこの記憶を残していくためには、もっと違う形が必要だと考え、出した結論が綺麗で楽しみながら参加できるこのスタイルだった。

離れていても東北に何かしたいと皆が思っているからこそ、ともしびプロジェクトは全国に広がった。これは多くの人々の想いを形にできるプロジェクトだと思っている。

東北に来てきっかけをもらった

自分が人との間に壁を作らない性格なので、活動中に人との壁を感じた事はあまりない。向こうが合わないなら仕方がない、と割り切っている。人

との出会いや連携はタイミングもあると思うが、僕は運が良く、幸いにも大震災後の活動はうまくかみ合っている。その中で、分からない事は分からないと言う事にしている。聞いてはいけないだろうかと遠慮すると、かえって壁ができてしまうので、正直に声を出してみる事が大事だと思っている。

僕自身は「ボランティア」や「支援している」という感覚は持っていない。最初はボランティアだと思っていたが、すぐにその感覚はなくなり、逆に今はキャンドルに火を灯すきっかけをもらったと思っている。100年200年続く文化にしたいという目標ができて、それを一緒に目指すメンバーがいて、今は本当に面白い。だから活動を続けられているのだと思う。



撮影：2013.5.27 宮城県気仙沼市 TOMOCAN作成風景



撮影：2013.2.27 ともしびプロジェクト ボランティア